

「ええ」の機能に関する考察 —文学作品の用例分析を通して—

金山泰子・二宮理佳

[要 旨]

本稿では「ええ」の機能として以下の点に着目して考察を試みた。「ええ」は単なる肯定ではなく「yes + α 」という側面があるという点である。先行研究では「ええ」の機能として「同意応答」の機能しか指摘されていない。しかしながら、筆者らのこれまでの調査から得られた被験者のコメントから、「ええ」は、「同意」、そして「肯定 (yes)」以外に、様々な気持ちが含まれている「 α 」の部分併せ持っているのではないかという考察に達している。本稿では、従来の研究からは網羅しきれていない「 α 」の部分、①「躊躇、迷い、ごまかしなどを表す機能」と②「断り、反対意見などを表明する機能」の2つに分類し、文学作品からの用例を挙げつつ分析を試みた。

[キーワード]

「はい」「ええ」の違い 肯定 (yes) + α 発話者の感情・意見・主張を含む表現 同意応答

1. はじめに

日本語の教科書では一般的に「はい」「ええ」の違いはフォーマリティと説明されている。また先行研究では、「はい」は認知応答、「ええ」は同意応答(北川 1977、日向 1980)、「はい」は談話・場面進行、「ええ」は参加・協調 (McGloin 1997) という説明にとどまっている。しかしながら筆者らのこれまでの調査 (2007、2009) からは、先行研究や日本語教科書の説明では網羅しきれない回答が多く見られ、「はい」「ええ」の機能については、さらなる考察が必要であると思われる。

調査の結果、「はい」「ええ」の使い分けには話者間の情報の共有や発話者の気持ちが関わっていること、「ええ」は積極的な意見・感情の表明であること、また「ええ」という表現には特定の「イメージ」があるということ、「ええ」は単なる肯定・同意ではなく「yes + α 」という側面があること、そして「ええ」の解釈は人によって多様であること等が浮かび上がってきた。

本稿では、「はい」との比較において最も特徴的だと言える側面、「『ええ』は単なる肯定・同意ではなく『yes + α 』である」という点に焦点をおき、用例を挙げつつ考察を試みる。

2. 先行研究

応答詞の「はい」及び「ええ」は類似点も多い一方、相違点も認められる。先行研究(北川 1977、日向 1980)では「はい」には「認知」、「ええ」には「同意」の機能があるとされている。McGloin (1991) は、「はい」の機能を「談話・場面を進行させる」、「ええ」

の機能を「参加・協調」と説明している。筆者らはこれらの基本的な定義をふまえた上で、「ええ」の機能に着目し分析を進めてきた。

まず、二宮・金山（2006）では「はい」のみ使用可能な文例、「はい」「ええ」が共に可能な文例について分析し、「はい」との対比を通して「ええ」の機能について考察した。その結果、「はい」「ええ」の使い分けには対話者が共有する情報の度合いが深く関与していることが分かった。共有する情報の度合いは話者間の関係を決定づけ、親疎・待遇関係へと密接に関わっていると考えられる。さらに、「同意する」という発話行為は、相手の発話内容について良いか悪いか（同意できるか否か）を判断するプロセスを経て表出するものであるということに着目した。よって「ええ」には、話者の判断に基づく相手への意見が表明されるのであって、単なる応答表現ではなく、非常に主体的かつ主張の強い表現であるの言えるのではないかと考察した。

続く金山・二宮（2007）では、教育現場での指導を考察する足がかりを見出すため、アンケート調査を実施し、非母語話者と母語話者の「はい」「ええ」に関する認知・解釈、使用状況を比較し「ええ」の機能について再考察を試みた。その結果、「ええ」にはかなりの幅があり、個々の意識によってその使い方・捉え方が異なるということがわかった。このような幅広さは、何を基準に「ええ」と「はい」の使い分けをしているかという点に関係していると思われる。つまり、人によって、または状況によって、待遇や丁寧さや改まり度に意識を置くか、相手との関係を意識するか、話者の気持ちの表明を重視するか等々が異なるため、使い方・受け取り方に幅が出てくるのではないかと考察した。

さらに金山・二宮（2009）の研究では、母語話者を対象に漫画を使用したアンケートを実施・分析した結果、「はい」「ええ」の使い分けの要因を「話者の気持ち」とした回答が多く見られ、特に「ええ」の選択理由には、「話者の気持ち」、「話者のイメージ」、「『ええ』が持つイメージ」という回答が多かった。また「ええ」は「yes（肯定）+ α 」で、その α の部分が人によって、また状況によって異なるという結果が得られた。

二宮・金山（2010）では、テレビ映像を用いたインタビュー調査を3名の被験者を対象に実施した結果、先行研究および筆者らの考察結果が再確認された。

本稿では、これまでの考察から浮かび上がってきた「『ええ』には、肯定・同意以外の意味を含む『yes + α 』という側面があること」に着目し、さらに考察を進める。

3. 「ええ」の持つ「yes + α 」の機能についての考察

筆者らのこれまでの調査では、先行研究ではカバーしきれない「ええ」の機能が被験者のコメントから得られた。その一つが「yes + α 」というものである。ここであらためて「yes + α 」という機能について定義しておきたい。「yes + α 」とは、従来の定義による肯定・同意機能にとどまらず、他の意見・感情を添加する機能である。では、この「 α 」の部分にはどのような要素が来るのであろうか。「 α 」部分の分析を進めるため、被験者のコメントから「同意」以外の要素を抽出したところ、以下の2種に分類された。躊躇、迷い、ごまかしなどを表す「曖昧系」と、断りや反対意見などを表明する「否定系」である。

表1は2007年、2009年の調査で得られた被験者のコメントを上記2種に分類したも

のである。コメントは原文のまま用いた。

表 1 : 「yes + α 」 の分類

分類	被験者のコメント
曖昧系 (躊躇、迷い、ごまかし等)	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の気持ちがはっきりしない場合は「ええ」を使う (2007) ・「はい」は答えとしてはっきりしすぎて変な時もある (2007) ・「ええ」は全面的な yes ではなく、何も言わないわけにはいかないからとりあえず使う (2007) ・分からない或いはよく知らない話題には「ええ」を使う (2007) ・ちょっとした気持ちのひっかかり (2009) ・にごす感じ (2009)
否定系 (断り、反対意見表明等)	<ul style="list-style-type: none"> ・相手は正しいと思いつつ、認めたくない時は「ええ」を使う (2007) ・納得できない時に返事をしなければならない状況で「ええ」を使うことがある (2007) ・「ええ」は「(yes 肯定)」以外のものを含む (2007) ・「ええ」は完全に yes ではない (2007) ・「はい」のみは完全に OK と解釈されがちなため、納得できないときは「ええ」(2007) ・「ええ」で同調する姿勢を見せつつ、それ以外にも言いたいことがある (2007) ・「でも」と続く場合は「ええ」が自然 (2009) ・「ええ」の直後より後に話すことを一番話したい (2009) ・「ええ」の次の言葉ではなく、他に言いたいことがある (2009)

以下では、上記の 2 分類にしたがって、用例を挙げつつ考察を試みる。引用部分の傍線は、筆者によるものである。また文学作品から分析部分を抽出した理由は以下の通りである。

文学作品においては、著者が発話者の心情・心理描写、人物設定、文脈、背景などを考慮し、入念に語彙選択が行われていることが推測される。「はい」「ええ」に関しても明らかな意図・理由のもと意識的に選択されていることが予想されるため、「ええ」の意味・機能を考察するために適切な用例であると考えた。

3-1: 曖昧系 (躊躇、迷い、ごまかし等) の「ええ」

本節では、躊躇、迷い、ごまかしなど、肯定を回避した曖昧な応答として「ええ」が使われている用例について検討する。

- (1) 立ち止まって振り返ると、見覚えのある二人の男が近づいてくるところだった。一方は湯川という男で、石神の古い友人だといっていた。もう一人は刑事の草薙だ。なぜこの二人が一緒なのか、靖子にはわからなかった。
「僕のこと、覚えておられますよね」湯川が訊いてきた。
靖子は二人の顔を交互に見つめながら頷いた。
「これから何かご予定が？」
「ええ、あの……」彼女は時計を見るしぐさをしていた。だが実は動揺し、時刻などは見ていなかった。
「ちょっと人と約束が」 (「容疑者 X の献身」)

用例 (1) は、名探偵と言われる草薙が殺人事件の重要参考人である靖子に質問をしている場面である。先行文は真偽疑問文であり、「はい」「ええ」共に可能であるが、この文脈では「はい」は不自然である。事件の真相を知っている靖子は「動揺し」て、なんとかごまかそう、その場をやり過ごそうとして「ええ、あの…」と答えている。「ええ」と応答してはいるものの、それは肯定ではなく、質問に答える意志もない。この引用部分の少し後には「逃げだしたい、というのが本音だった。」という靖子の本心を述べる文がある。このような肯定や応答そのものを回避する場合には「ええ」が使われると考えられる。

(2) 玄関に立っていたのは、三歳くらいの男の子と父親らしい三十代の男だった。

(中略)

「こんな雨の日にお邪魔して、申し訳ありません」

男が用件も名前も告げずいきなりそんなふうに切り出したので、わたしは戸惑った。

「最近、引っ越してこられたのですか」

「ええ、まあ」

わたしはあいまいに答えた。

(「夕暮れの給食室と雨のプール」)

用例 (2) は、新しい家へ引っ越してきたばかりの「わたし」(女性)と、そこに突然訪ねてきた男との会話である。この引用文の少し後で男は「あなたは、難儀に苦しんでいらっしゃいませんか」と唐突に言い、「わたし」は男が「ある種の宗教勧誘員」であることに気づく。先行文は真偽疑問文であり、応答は「はい」「ええ」共に可能な文脈であるが、「はい」ではなく「ええ」により、新しい土地で、素生の知れない初対面の男に対して、はっきりと肯定するのを避けようとする警戒心のようなものが表現されている。

(3) わたしは適当な言葉が浮かばず、ただうなずくだけだった。給食室のレベルについてなど、考えたこともなかったからだ。

「いろいろな地区の担当になって、勧誘というか布教というか、そういった種類の活動をしているのですか」

わたしは言葉を選んで慎重に言った。

「ええ、まあそんな感じです」

彼はあいまいに答えた。仕事の話になると急に、口が重くなったようだった。彼には難儀という言葉より、給食室という言葉のほうがずっとよくなじんでいるように思えた。

(「夕暮れの給食室と雨のプール」)

用例 (3) は用例 (2) と同じ作品からの引用である。「わたし」は散歩中に、小学校の裏門で給食室を眺めている宗教勧誘員の父子を見つけ、声をかける。給食室について「まるで給食室評論家みたい」に語る男に対して、「わたし」は「適当な言葉が浮かばず」、仕事に関する質問を投げかける。この先行文も真偽疑問文であり「はい」「ええ」共に可能であるが「ええ」が使われており、男は「口が重くなって」「あいまいに」答えること

により、はっきりとした肯定を回避している。また「わたし」から見た父子は、「静かに溶けてしまいそうな」「哀しげな目」をした「はかなげな」存在として登場する。「わたし」にとって父子は一種不可思議で曖昧な存在として通り過ぎていく人物として描かれており、ここに現れる「ええ」には、このような男の曖昧さまでもが表現されていると考えられる。

さらに、上記の用例 (3) (4) は 2 例とも直後が「まあ」となっている。「KOTONOHA『現代日本語書き言葉均衡コーパス』少納言」(<http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/>、2012 年 11 月 24 日) によると、「ええ、まあ」の用例は 76 件であるのに対し、「はい、まあ」の用例は 1 件のみである。「ええ、まあ」という表現は一種のセットフレーズとして考えられるかもしれない。この「ええ」には、相手の質問に対して応答しようという意志はなく、同意・肯定の機能はほとんど無いと言ってよいだろう。

3-2: 否定系 (断り、反対意見表明等) の「ええ」

本節では、断り、反対意見表明など、否定に近い意味で使われている用例について検討する。

筆者らは 2006 年に初級教科書に現れる「ええ」について調査した結果、“Japanese for everyone” に、「ええ」について “Answer the questions in the affirmative, but add some qualifying or contrasting of your own” という記述があることを指摘し、応答詞の後に文またはフレーズを伴う場合は「ええ」が自然であると考察した (56)。“Japanese for everyone” (以下、JFE) における用例を以下に示す (傍線筆者)。

A: しごとは、おもしろいですか。

B: ええ、おもしろいですが、とてもいそがしいです。(p.48)

A: 映画を見ましたか。

B: ええ、見ました／けれど、おもしろくありませんでした。

ええ、でも おもしろくありませんでした。(p.87)

JFE の用例および記述では、「ええ」の後には、同意の程度を弱めたり限定・反対する内容が続く、と示唆されている。しかしながら、その機能について深く掘り下げられてはいない。筆者らの 2009 年の調査において被験者から得たコメントの中に「『でも』と続く場合は『ええ』(が続く)」というものがあり、一つの仮説として「ええ」は逆説の接続詞と共起しやすく、「ええ」とひとまず肯定の姿勢を示すものの、結果としては相手の意見を否定している、または自己の意見を主張しているという構造があるのではないかと考えられる。

以下は「KOTONOHA『現代日本語書き言葉均衡コーパス』少納言」で「ええ」と「はい」に逆説の接続詞が後続する件数を検索した結果である。

表 2：「ええ」「はい」に逆説接続詞が後続する件数

後続する逆説接続詞	ええ	はい
～、でも…	42	6
～。でも…	59	31
～、しかし…	6	5
～。しかし…	5	6
～、けれども…	0	0
～。けれども…	0	0
合計	112	48

(<http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/>、2012年11月24日)

あくまでも目安に過ぎないが、上記のとおり「はい」に逆説の接続詞が後続する用例は48件であるのに対し、「ええ」の場合は112件にも上り、「ええ+逆説系接続詞」というパターンが多く見られることがわかる。ここからも、「はい」が肯定を意味するのに対し、「ええ」は単なる肯定ではなく、逆説系接続詞を伴って否定的なコメントが後続する可能性が高いのではないかと予想される。

3-2-1：逆接系接続詞を伴う否定系の「ええ」

以下では、「ええ」が逆説系接続詞を伴って、断り、反対意見表明など、否定に近い意味で使われている用例について検討する。

- (4) 「どうか浜田君、これから後も君だけは遊びに来て下さい。遠慮するには及びませんから」と、私は別れ際にそう云いました。

「ええ、だけれど当分はうかがえないかも知れませんよ」と、浜田はちょっともじもじして、顔を見られるのを厭うように、下を向いて云いました。

(「痴人の愛」)

- (5) 母が、のぞきに来て、ひとりですわっている禎子に、餅が焼けたから食べにこないか、と誘った。

「ええ、ありがとう。でも、あとでいただくわ」

禎子は静かに断った。

(「ゼロの焦点」)

上記の2例はいずれも「誘い」に対する「断り」の例である。日向(1980)は、聞き手の気持ちにそって依頼するような発話(依頼文・勧誘文)には「はい」「ええ」「うん」が待遇差を伴い使い分けられると述べている(224)が、「誘い」に対する「断り」の場合は「はい」はやや不自然であり、待遇差や親疎に関わらず「ええ」のほうがより自然であると考えられる。

- (6) 「やあ、先刻は失礼しました。どうでしたかしら？分りましたか？」

私はいきなり嘸み着くような調子で尋ねると、浜田はイヤに落ち着き払って、私の顔を憐れむが如く眺めながら、
「ええ、分ることは分りましたが、…………しかし河合さん、もうあの人はとても駄目です、あきらめた方がよござんすよ」と、キッパリ云い切って、首を振るのでした。
(「痴人の愛」)

用例 (6) は、私 (河合) が妻の素行を浜田に探らせ、その様子を聞いているという場面である。先行文は真偽疑問文であり、「ええ」はそれに対する肯定である。真偽疑問文に対する応答「はい」「ええ」共に可能であるが、その後に「しかし」と続いて、その後続文に話者の意見が表明されている。「キッパリ云い切って」という表現があることから、話者の言いたいことは相手の発話に対する肯定・同意ではなく、むしろ後続する反対意見であることが明らかである。

- (7) 私「ハッケです。」
同じ相手 「ライプトロースト先生？」
私「いいえ、ハッケです。」
相手「ライプトロースト先生をお願いしたいんですが。」
私「ええ、わかっています。しかしこちらはハッケです。こちらのライプトロースト先生じゃありません。ライプトロースト先生は引越されたか亡くなられたかです。もう診察はされないのかもしれませんが、私は知りません。私はハッケです。」
(「冷蔵庫との対話」)

用例 (7) は、筆者のハッケが何回も間違い電話を受ける場面である。以前ここに住んでいた医者へ患者がかけてくるものだったが、あまりに頻繁な間違い電話に頭に來たハッケは「ええ、わかっています。しかしこちらはハッケです。こちらはライプトロースト先生じゃありません。(後略)」と強く返す。この部分は「ええ、あなたの言っていることはわかりますが、しかし」という「しかし」以降の後述部分に強い発話意図が感じられる構造になっている。つまり、「ええ+ α 」の α 部分に焦点を当て、強い否定の気持ちをのせている。引用文以前の通常の電話のやりとりでは、「もしもし?」「はい、こちら、ハッケです。」と「はい」が使われていることから「ええ」に変わっているのは意図的だと考えられる。苛立ち・気持ちの高揚が表現される場面では「ええ」を使用し、話者ハッケの気持ちをより強く表していると言えるだろう。

- (8) 「ね。そうでしょ。そのマチダさんに私は雨をやませろ、とっているのです。」
「は。しかしですねえ、雨というものは天然自然の現象だってそれを人為的に降らしたりやましたりすることはできないんですよ。」
「でも私は毛皮が湿って不愉快なのです。」
「ええ、でもできないものはできないのです。」
(「猫にかまけて」)

用例 (8) は、雨の日、湿度が高いため毛皮が湿って不快だと騒ぐ猫と飼い主マチダとの会話である。マチダが、猫に、雨というのは天然現象であるから人為的に降らせたりやませたりすることはできないのだと言いつつ含めようとするのだが、猫は全く聞き入れない。その猫に対し、「ええ、でもできないものはできないのです。」と強く反論する部分でマチダは「ええ」を使用している。用例 (7) 同様、強い語調での反論部分に「ええ」が使用されている。この「ええ」は同意応答としてどのくらい機能しているのだろうか。二宮・金山 (2006) では、「同意する」という行為には同意できるか否か相手の発話内容について評価・判断する過程が必要であることを指摘し、『「ええ」には、話者の判断に基づく相手への意見が表明されている』という考察結果を提示したが、用例 (8) においても、単なる応答表現ではなく主体的かつ主張の強い表現としての「ええ」の機能 (二宮・金山 2007) を見て取ることができる。「ええ」の後に「でもできないものはできないのです。 (傍線筆者)」と相手を否定する発話が続くが、この後続部分には、「ええ」による「同意」が色あせて見えるほどの強い意見が表明されている。この「ええ」は削除可能であることから、従来の先行研究で言われている「相手に対する同意・同調」する機能は全くなく、単に相手の発話がこちらに届いたという印でしかない。これは、金山・二宮 (2007) の母語話者対象のアンケート調査から得た『「はい」のみは完全に ok と解釈されがちな為、納得できない時は『ええ』を使う。』、「相手は正しいと思いつつ、認めたくない時は『ええ』を使う。』、「納得できない時に返事をしなければならぬ状況で『ええ』を使うことがある。」等のコメントにも通ずるものである。したがって、飼い主マチダの「ええ」には肯定の意味は含まれていないのではないかと考えられる。

3-2-2: 逆接系接続詞を伴わない否定系の「ええ」

前節では、逆接系接続詞が後続して否定に近い意味で「ええ」が使われている用例について考察した。しかしながら、否定系の意見表明が後続する「ええ」は必ずしも逆接系接続詞を伴うとは限らない。本節では、逆説系接続詞は伴っていないが「同意・肯定」の意味を表わさない「ええ」の用例について紹介する。

- (9) 「ところがそれがひどいんです。たとえばかっこうとこうなくのとかっこうとこうなくのとでは聞いていてもよほどちがうでしょう。」
「ちがわないね。」
「ではあなたにはわからないんです。わたしらのなかまならかっこうと一万云えば一万みんなちがうんです。」
「勝手だよ。そんなにわかってるなら何もおれの^{ところ}処へ来なくてもいいではないか。」
「ところが私はドレミファを正確にやりたいんです。」
「ドレミファもくそもあるか。」
「ええ、外国へ行く前にぜひ一度いるんです。」
「外国もくそもあるか。」
「先生どうかドレミファを教えてください。わたしはついてうたいますから。」
(「セロ弾きのゴーシュ」)

用例 (9) は、セロを習いたいと訪ねてきたかっこうと、セロ弾きの名手ゴーシュとの会話である。ゴーシュからセロを習いたい一心で教えを乞おうとするかっこうと、かっこうを見下して指導を断ろうとするゴーシュとの会話は全くかみ合っていない。「ええ」の先行文と後続文のくだりでは、ゴーシュの「ドレミファもくそもあるか」という発話を、かっこうは「ええ」で一旦受けてはいるもののほとんど無視・黙殺して、「外国へ行く前にぜひ一度いるんです」と、ひたすら自らの主張を言い続けている。ここでは「ええ」は先行文に対する応答としての機能を持たず、「同意」「肯定」の意味は全く認められないと言えよう。

また「ええ」の後に「でも」等の逆説接続詞が省略されているという解釈もあり得るが、その場合、相手の発話を一旦は「ええ」で受けた後に話者の最も言いたいことを続けているパターンであり、前項の3-2-1に類するものである。いずれの解釈にせよ、上記のかっこうの「ええ」には「同意・肯定」の機能は認められないと言えるのではないだろうか。

3-3. 後続文を伴わない「ええ」

前節までは、曖昧・迷い等の気持ちをのせる「ええ」と、「同意・肯定」の機能ではなく否定に近い意味で使われている「ええ」について、後続文に着目しつつ、分析・考察を試みた。

本節では、後続文はなく、「ええ」のみ単独で使われている事例を紹介する。この事例では、「ええ」そのものが発話者自身の意見・感情を内包する表現として使われているのではないかと考えられる。

たった 1 ぴっき、ねこに 見むきもしない、白い

うつくしい ねこが いました。

ねこは、白いねこの そばに 行って、

「おれは、100 万回も しんだんだぜ！」

と いいました。

白いねこは、

「そう。」

と いったきりでした。

(中略)

「おれは、100 万回も……。」

と いいかけて、ねこは、

「そばに いても いいかい。」

と、白いねこに たずねました。

白いねこは、

「ええ。」

と いいました。

(「100 万回生きたねこ」)

上記の例は、「100 万回生きたねこ」という絵本からの引用で、主人公の「100 万回生き

た」雄猫と白い雌猫との会話である。この用例は「ええ」のみで後続文を伴っていない。他の猫たちが雄猫に媚び、特別扱いする中で、この白い雌猫は、「そう」と返すだけで雄猫に興味を示そうともしない。そして雄猫の「そばにいてもいいかい」という許可求めの質問に対して「ええ」で応じる。文法上は「はい」「ええ」どちらも可能なこの文脈で「はい」ではなく「ええ」が使われていることに注目されたい。「はい」と「ええ」では明らかにニュアンスが異なる。先行研究を踏まえ、二宮・金山(2006)では「はい」の機能と効果を「相手の情報を、敬意を持って受け取ったというサインを示す」(59)と定義した。つまり「はい」であれば、雄猫の許可求めを敬意を持って受け入れたという印象になるが、「ええ」を使うことにより「あなたは私のそばにいてもいいという判断を下した」というニュアンスが生じていると考えられる。二宮・金山(2006)が指摘したように、この「ええ」は単なる応答表現ではなく、話者の判断に基づく相手への意見表明(59)であると考えられる。「見むきもしない」「いったきり」というような表現が使われていることから「はい」ではなく「ええ」が意図的に選ばれていることが窺われる。

4. まとめ及び今後の課題

本稿では、「はい」の機能との比較において、最も異なっていると考えられる「ええ」の持つ「yes + α 」という点に着目し、用例を挙げつつ考察を試みた。その結果、従来の先行研究では網羅できない「ええ」の機能の一端がより一層可視化されたと考えられる。「まあ」「あの」などの表現を伴って、躊躇・迷い・ごまかしなどを表す機能と、逆接系接続詞を伴って、断り・反対意見などを表明する機能である。さらに、「ええ」そのものに話者の主張・スタンスをのせる機能についても考察を進めた。また従来の研究では、先行文に応じて「はい」「ええ」の違いについて分析する方法が一般的であったが、今回の考察からは、「ええ」はむしろ後続文が重要であるということも浮かび上がってきた。

本稿の分析を通して、「ええ」は明らかに「はい」とは異なる意味・機能を有しており、発話者の感情・意見・主張を含む表現であるのではないかという筆者らの考察を補完する結果が得られた。ひいては発話者の性格・思考・人物像をも反映させることができる可能性を含有した表現であると言えるのではないだろうか。

本稿では用例数も限られており、さらなる調査・考察が必要であるが、従来の先行研究では指摘されていなかった「ええ」の機能に焦点を当てると同時に、筆者らのこれまでの考察結果を裏付けることができた。今後データ数を増やすことにより「ええ」の機能をさらに明らかにしていきたい。

用例出典

容疑者 X の献身：東野圭吾(2005)文春文庫「容疑者 X の献身」文藝春秋
夕暮れの給食室と雨のプール：小川洋子(1994)文春文庫「妊娠カレンダー」文藝春秋
Japanese for Everyone：Magara, Susumu(1990)Gakusyuu kenkyuusha
痴人の愛：谷崎潤一郎(1996)新潮文庫「痴人の愛」新潮社
ゼロの焦点：松本清張(2011)新潮文庫「ゼロの焦点」新潮社
冷蔵庫との対話：諏訪功訳(2004)「冷蔵庫との対話 アクセル・ハッケ傑作集」三修社

猫にかまけて：町田康（2004）「猫にかまけて」講談社
100万回生きたねこ：佐野洋子「100万回生きたねこ」（1977）講談社

参考文献

- 金山泰子・二宮理佳（2007）「『はい』『ええ』の使い分けに関する意識調査」
「ICU 日本語教育研究 3」 pp.3 - 31 国際基督教大学日本語教育研究センター
- 金山泰子・二宮理佳（2009）「『はい』『ええ』の使い分けに関する調査—漫画を使用したアンケートを通して—」
「ICU 日本語教育研究 5」 pp.19 - 44 国際基督教大学日本語教育研究センター
- 北川千里（1977）「『はい』と『ええ』」『日本語教育』33号 pp.65-72 日本語教育学会
- 阪本俊夫（2001）「現代の社会関係と敬語の可能性」『月刊言語』11月 pp.34-42 大修館
- 富樫純一（2002）「『はい』と『うん』の関係をめぐって」定信利之編『「うん」と「そう」の言語学』 pp.127-157 ひつじ書房
- 日向茂男（1980）「談話における『はい』と『ええ』の機能について」『国立国語研究所報告』65号 pp.215 - 229 国立国語研究所
- 二宮理佳・金山泰子（2006）「『ええ』の機能についての一考察—『はい』との比較を通して—」
「ICU 日本語教育研究 2」 pp.51 - 63 国際基督教大学日本語教育研究センター
- 二宮理佳・金山泰子（2008）「初級教科書に現われる『ええ』についての調査報告—初級における応答表現指導についての一考察—」「ICU 日本語教育研究 4」 pp.39 - 57
国際基督教大学日本語教育研究センター
- 二宮理佳・金山泰子（2010）「『はい』『ええ』の使い分けに関する考察—テレビ映像を使用したインタビュー調査を通して—」ICU 日本語教育研究 6」 pp.3 - 13 国際基督教大学日本語教育研究センター
- McGloin, Naomi H. (1991) Hai and Ee : An Interactional Analysis. *Japanese/Korean Linguistics*.

A study of the function of “ee” —A literature-based analysis

Yasuko KANAYAMA, Rica NINOMIYA

This paper examines the function of “ee” in terms of its meaning as “yes plus something more.” Preceding studies have defined “ee” only as an “agreement response.” However, our surveys have been indicated that “ee” can mean not only “yes” but also “something more”; this “something more” captures various feelings of a speaker. In this paper, these feelings are classified into two groups: (1) hesitation, perplexity, and deception, and (2) decline and disagreement. Further analysis is then conducted using instances in the literature.